

二〇世紀初頭のアメリカ合衆国における モンテッソーリ運動の展開過程

阿 部 真 美 子

1. はじめに

モンテッソーリ運動（以下、M運動と書く）は、近・現代幼児教育史において、十九世紀末から展開されたフレーベル運動以降の、代表的な幼児教育運動である。しかも、M運動は、フレーベル運動よりはるかに広範囲の地域にわたって展開され、その組織的規模も大きい。M運動は、その展開過程の中で、欧米諸国、東南アジア諸国の、現在の幼児教育理論及び実践に対して大きな影響を及ぼしている。従って、M運動が展開される過程の中で、どのような影響が各国の幼児教育理論及び実践にもたらされたのかを探ることは、現代社会における幼児教育の世界史的像を探ることに関連するのである。私は以上のようなねらいで、M運動研究、特にアメリカ合衆国におけるM運動についての研究を進めてきた。アメリカ合衆国では、これまで二回にわたってM運動の展開がみられ、モンテッソーリ教育（以下、M教育と書く）の導入・受容が積極的に行なわれてきた。M運動をみていく上で、合衆国を対象とすることは、不可欠である。

まず、私は、合衆国における二回のM運動のうち、一回目の方から研究を進めてきた。今回は、その中間報告である。つまり、M運動をみていく上での前提的作業についての報告を中心とし、それをもととして、若干の検討を加わえたい。

2. M教育の導入・受容の期間及びM運動の組織化の状況

M教育の導入、受容の試みは、その当時の合衆国における幼児教育理論及び実践に対して、どのような理論的、実践的方向づけを示すものであったのだろうか。又、果してどのような方向づけを示しえたのであろうか。このことを文

献上から探るために前提的作業として作成したのが、表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲである。表Ⅰは、「マリア・モンテッソーリ博士と、モンテッソーリ運動、1909—1961」（ギルバート・E・ドナヒュー作成）—“Dr. Maria Montessori And The Montessori Movement: A General Bibliography of Materials in the English Language, 1909—1961” by Gilbert E. Donahue⁽¹⁾の中に収められた総文献587を発行年、文献の種類毎にその数を記したものである。表Ⅱは、文献数の多い1912—14年に限って抜き出したものである。又表Ⅲは、表Ⅰをグラフ化したものである。これらの表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲから、およそ次のことが、つかめると思う。

(i) 文献上からいうと、M教育導入が試みられたのは、1909年である。（表Ⅰから）

(ii) M教育導入において、1909—1911のあいだ、雑誌が、導入の窓口となる。（表Ⅰから）

(iii) 1912年になると、新聞でもとり上げられはじめ、学会等の機関誌でもとり上げられる。公的機関の側からも刊行物が出され、又モンテッソーリ自身の著作の翻訳、M教育をテーマとする単行本が出版されている。このことから、教育界及び一般国民のM教育への関心が強まってきたのが、1912年とみてよいだろう。（表Ⅰから）

(iv) M教育への関心が、最も強い時期が、1913年である。雑誌、新聞、学会等の機関誌、公的機関の側の刊行物、M教育をテーマとする単行本の出版が増えている。

(v) 表Ⅰから 1914年になると、新聞においてとり上げられる件数が、13年よりずっと減少している。これは、1914年になると一般国民のM教育への関心が、薄れたことを示している。1915年になると、雑誌、学会等の機関誌、公的刊行物でとり上げられる数が、ずっと減少していく。教育界、一般国民の関心が下火になった

ことを示している。

(e) (d)からすると、M教育への全般的関心が下火になったにもかかわらず、M教育をテーマとする単行本の数は、ピーク時の1913年と同数である。又、教育学の書物全体の中に、M教育を位置づけようとする文献は、1914年からみられ、M教育への関心が、殆んどみられなくなっても、数は多くないが、出されていく。M教育について専門的にとりくんだ修士・博士論文は1917年以降にみられる。このことから、M教育を検討し、研究しようとする動向は、M教育への全般的関心の薄れてきた時期から始められているように思われる。(表Ⅰから)

(f) M運動の組織として設立されたモンテッソーリ協会側のM理論導入の動きは、遅く1915年になってはじめてみられる。しかし文献数は多くはない。1960年で3の文献がみられるのは第二の運動が展開される頃と重なる。このことから、組織的な動き、その基盤の弱さを推測させる。(表Ⅰから)

(g) 以上のことから、M教育への関心の状況が、おおよそつかめたと思う。表Ⅱのように、M教育への関心が強かった、1912—14年にしぼって、関心の動向を探てみると、雑誌の中でモンテッソーリの著作紹介及び書評としてとりあげられた件数が、かなり多いことが、目立つ。又、雑誌でも、M教育の内容を扱っているもの学会等の機関誌で扱っているものの数が、1909—1961年の各種類別毎の総数のほぼ半数である。又、公的刊行物も、ほぼこの時期に集中し、M教育をテーマとする単行本も、ほぼ半数出されている。この時期は、教育界、一般国民の関心が高かったが、M教育についての検討、研究はこの時期以後であることが推測される。(表Ⅱから)

(h) 表ⅢからM教育への最も関心の強かったのが、1913年であることが、確認される。グラフは、1912年から上向きとなり、13年でピークに達し、急速に下向きとなり、1915年には、かなり関心の薄れがみられる。1917.8年ごろから関心は下火のままほぼ横ばい状態となり、1955年ごろから、少しづつ、グラフが上向きとなっていく。1913年は、モンテッソーリ自身が訪米し、講演をした身である。従って、このことに

関する記事数が多かったと考えられる。

(i) — (j) のことからすれば、M教育への関心は広く国民的な規模でみられたが、持続せず、短期間で終わってしまう。M教育への関心は、研究的視点から持ち続けられる。1913—1917.8年の間に展開された運動の組織も、大きくなかったことが推測される。M教育の導入・受容による合衆国の幼児教育理論及び実践へのインパクトは、国民的関心の強かった時期以降の文献の中から探り出せるのではないだろうか。今回は、ここまで探り出せなかったが、今後の課題としたい。

以上のことを念頭に置きつつ、現時点で入手した合衆国におけるM運動の展開についてテーマとした博士論文4冊を手掛りとして、M教育の導入・受容の観点、及びその際の若干の状況M運動の組織化の過程、運動の衰退の状況及びその国について、以下で追ってみたい。先述の博士論文は、次のものである。

① The Growth of the Montessori Movement in the United States, 1909—1970. 1971. P. Appelbaum.

② Origins and Current Status of The Montessori Movement in the United States. 1963 Fugina, C.D.P.

③ American Writings of Maria Montessori: An Inquiry into Change in the Reception and Interpretations Montessori Educational Ideas 1910—1915 and 1958—1970. 1973 I. Keough.

④ Conditions Associated with the Rise and Decline of the Montessori Method of Kindergarten-Nursery Education in the United State from 1911—1921. M. Wills.

3. M教育の導入・受容の観点

2でみたように、二〇世紀初頭の合衆国における文献上のM教育の導入、受容は雑誌をつうじて行なわれた。その雑誌の一つが、「幼稚園及び小学校教育」(Kindergarten And Primary Magazine)である。この雑誌は、名前からもわかるとおり、幼稚園、小学校教師を対象としたもので、現場の実践に対する啓蒙的性格を持

つものであった。この雑誌に、最初にM教育について論文が載せられたのは、1909年である。これは、J・B・メルル(J.B. Merrill)という哲学博士に¹⁾よって書かれた論文である。これは、合衆国において最初にみられたM教育に関する文献である。J・B・メルルは、1909—14年かけ7・8のM教育に関する論文を載せている。メルル女史が、M教育に関心を持ったのは、イタリアにおけるM運動家であり、モンテッソーリの親しい友人でもあったフランチェツィ男爵(the Barrones Franchetti)をつうじてであった。彼女が載せた論文は、次の様なタイトルのものであった。

「幼児教育における新教育方法」(1911)
“New Method in Infant Education.”「モンテッソーリ教育方法における軽視されているところ」(1913)“Neglected Corner in Montessori Method”

「モンテッソーリの真価」(1914)“Appreciation: Montessori”

彼女が、M教育に評価を与えたのは、当時のフレーベル主義の幼稚園教育における教育内容、教育方法に対する批判に立ち、それらの改善のために役立つと考えたからである。彼女はM教育における作業(occupation)が豊富かつ多様であること、教育方法において、教条主義的でなく、自由が尊重されていることを評価した。⁽²⁾

先述の雑誌と並んで、M教育の導入がなされたのは、「マクルーア」誌(McClure's Magazine)であった。この雑誌は、教育関係だけではなく、教育も含めて、時代の先端をいくような話題を先がけてとり扱って、注目を集めている雑誌であった。M教育も又、そのような話題としてとりあげられた。この雑誌に載ったM教育についての最初の論文は、S・トツイア(Josephine Tozier)による「素晴らしい天才的教育者—マリア・モンテッソーリの教育方法」(1911年)“An Educational Wonder—Worker—The Methods of Maria Montessori”である。この論文の中で、彼女は、次の点においてM教育を評価した。(i)ごく幼ない年令の子どもに、その能力に少しの過重な負担をかけることなく、はじめて読み、書きを教えることがで

きる。(ii) M教育における「実生活の練習」(Practical life activities)によって、3歳児でもひもやりボンが結べ、ボタンやホックのとめはずしができるようになる。(iii)更に、M教育の方法では、自動教育(auto—education)感覚的活動(sensorial activities)が重視されている。静しゆく遊戯(silent game)そして、以上の(i) — (ii)を具体化する「教具」(didactic apparatus)が注目された。⁴ページにわたって、絵入りつきで紹介された。⁽³⁾

このトツイアの論文は、イギリスの批評家アーチャー(Dr. William Archer)をよりどころとして、書かれたものである。「マクルーア誌」の編集長S.S.マクルーア(S.S. McClure)は、その「自伝」(“My Autobiography”), (1914)の中で、次のように、このことを指摘し、この論文が、M教育を積極的に世に出したものであるとしている。

「……私は、アーチャーの理論が、モンテッソーリ理論を代表していると確信した。雑誌に記事が載る前に、モンテッソーリ理論は、合衆国における幼稚園教育や教育学の二・三人の権威者に押さえつけられていた。……そのうち、M教育に反対するという態度をとっているものもいた。彼らは、モンテッソーリが、過去の偉大な教育家の仕事を評価しているという、ただそれだけの理由で、古いときめつけていた」⁽⁴⁾

更に、「マクルーア」誌では、トツイアの論文以後、M教育に関する論文、情報を載せ、M教育の普及に積極的な役割を果たしていった。例えば、M運動において、M教育の実践的指導者であったA. E. ジョージ(A. E. George)による、1912年「アメリカにおける最初のモンテッソーリ・スクール」“The First Montessori School in America”という論文が、載せられている。その中で、A.E. ジョージは当時学校教育で行なわれていた、抽象的課業(abstract lesson)に対する批判に立つて、M教育を次の点で評価している。(i) M教育では、精神的自由が重視され、そのため子どもの活動(activity)が豊富である。(ii)「手仕事」(hand work)が多様あり、活動的自由をとおして秩序(order)と規律(discipline)を達成できる。このように、M教育の内容・方法を評価し、かつ実際の

効果⁽⁵⁾を認めている。

以上のように、M教育の導入における観点のいくつかの例を挙げたが、いづれも、M教育の実際の効果及び教育内容、方法があげられている。これは、導入の時点におけるM教育への期待についての傾向の一端が、ここから推測できよう。その期待は、従来の幼稚園教育批判の裏返しであると言える。

4. M運動の組織化の過程

M教育への関心が高まるにつれ、M教育を支持する人々や、M教育を実践の中に導入しようとする人々の組織化がなされた。その最初のものが、1912年に設けられた、アメリカのモンテッソーリ委員会 (the Montessori American committie) であった。これはモンテッソーリ自身の要請で設立された。これが母胎となり、1913年5月法人組織化され、ワシントン市 (Washington, D.C.) に設けられ、モンテッソーリ教育協会 (The Montessori Educational Association) となった。この中心的役割を果たした人々は次のようである。

会長、アレキサンダー・グラハム・ベル夫人 (Mrs. Alexander Bell)

副会長、P.P.クラクストン (P.P. Claxton—教育委員)

S.S.マクルーア (S.S. McClure—「マクルーア」誌の編集長)

B. ウィルス夫人 (Mrs. Bailey Willis)

秘書、J. ダンロップ (John, Dunlop-M.P)

会計係、G.H. グロスベノーア (Gilbert H. Grosvenor—「ナショナル・ジオグラフィック」誌の編集長)

特別委員、アレキサンダー・ブラハム・ベル (Alexander Graham Bell) C.J.ベル (Charles J. Bell—ワシントン市の American Security and Trust Company の会長)

A. E. ベントリー (A.E. Bentley—ワシントン市の公立学校の音楽教育の指導者)

J.A. ブラシャー (J.A. Brasher—ピッツバーグにある教育財団の議長)

W.K. クーパー (W.K. Cooper—Y. M.C. A. の秘書)

W.M. デイビッドソン (W.M. Davidson—ワシントンの公立学校の校長)

D.C. フィッシャー夫人 (Mrs. Dorothy Canfield Fisher)

J.B. ラーナー (J.B. Larner—弁護士)

E.C. ウェスコット (E.C. Wescott—ワシントンの西部の高等学校の校長)

M. W. ウイルソン (Margaret Woodrow Wilson—ウィルソン大統領の娘)

モンテッソーリ関係の仕事の指導者、A. E. ジョージ (Anne E. George)

モンテッソーリ教育協会は、このような著名人によって支えられており、それ故にM教育への高い関心が寄せられたとみることもできる。この組織は、1914年ごろには700人ほどのメンバーを有していた。この協会の目的は、「アメリカにおいて、モンテッソーリ博士の教育原理及び理論に基づく教育運動を促進し、発展させること、更に子どものための学校の設立と維持を援助し、又モンテッソーリの原理に従って指導されている、観察と実践のための学校を援助すること」とされている。更に、そのために、モンテッソーリに関する情報を集めるための中心となる事務局を維持すること、機関誌をつうじて、モンテッソーリとこの教育に関心をもつ人々との接触をはかること、無料のモンテッソーリ・スクール (the free Montessori School) を援助すること、同種の学校の設立を促すこと、その方法の研究のために教育者、科学者に協力を求めること、モンテッソーリが、国際モンテッソーリ・コースを設立するのを援助すること、モンテッソーリがその教育方法を発展させるのを助けることを、目的としてかかげている⁽⁶⁾。

こうした目的に沿って、この協会は、次のような活動を行なっていた。一つは、モンテッソーリ教育を普及するためのモデル・スクールの設立である。この学校はA.G.ベル夫妻のワシントン市の中家に設けられた。この指導の任にあたったのは、A.E.ジョージである。この学校に子どもを入学させた親たちは、教養もあり社会的地位もある人々であった。これが成功をおさめ、ベル夫人は、更に、新たにカロ

ラマ街 (Karorama Road) の 3 階建てのビルディングを購入し、モンテツソーリ・スクールを設けた。更に、ジョージタウン地区 (Georgetown district) の「ボルタ」誌 (the Volta Review) のビルディングの中にも設立した。この指導も又、A.E. ジョージ⁽⁷⁾があたり、1916—1919年まで、その任についた。

この協会は、隣保事業に関連のある無料の学校を、ワシントン市の南西部のセツルメント「フレンドシップ・ハウス」(Friendship House) に1913年11月設立した。これがモンテツソーリ無料学校 (the Montessori Free school) である。協会は、隣保事業の一環として、貧しい恵まれない子どもたちの教育として、M教育導入を目的としていたのであるが、どの位まで積極的であつたのかわからない。この無料学校は、モンテツソーリ教員及びM教育に関心ある人々のための観察校であり、モンテツソーリ教師になろうとする人々のための実習校であつた。この学校は、この後者のねらいが大きかつたようで、「国中から教師が、モンテツソーリ教育方法の成果を見ることができ、教育心理学者は、研究の場をもつことができる」という⁽⁸⁾ように、加わえて研究の場でもあつたのである。

更に、この協会は、M教育に関する情報等々について、メンバーに提供するため、機関誌を企画した。その第1号は、1913年11月に出された。これは、ほんの小さなもので後、「子どもの自由」“Freedom for the Child”という、より大きな季刊誌となつた。これは、1916年まで出されたが、資金不足のため、廃刊された。

この協会は、更に、アメリカ合衆国におけるモンテツソーリ教員養成学校の設立を望んだが1913年ごろの段階では、実現しなかつた。このころ、モンテツソーリ教員養成は、彼女自身の手によって直接行なわれ、従つて資格も、ローマの国際的なトレーニング・コースを卒業した者に与えられていた。それは、M教育について資格をもたず、よく知らない者が、学校を建てること⁽⁹⁾の危険を、モンテツソーリが恐れたからであつた。

1914年になると、モンテツソーリ教育協会に二・三の支部が、結成された。ワシントン支部 the Washington Chapter、ニューイングラン

ド支部 the NeW England Chapter ニューヨーク支部 the New York Chapter である。このニューヨーク支部によって、二番目の無料のモデルスクール (Free demonstration school) が設立された。この学校は、ローマに最初にできたモンテツソーリの「子どもの家」の理想を実現したものであり、ニューヨークの77番街の端にあつた新共同住宅の中に設けられた。この指導者は、モンテツソーリ教員資格をもつフレーザー (Miss Fraser) であつた。ニューイングランドの支部は、カナダ、ニューイングランド (ニュー・ハンプシャーを除く) から、75人の会員を有した。このメンバーには、モンテツソーリに傾倒するM教育支持者から、幼稚園の中でモンテツソーリ教具を用いることによってモンテツソーリとフレーベルの両システムの結合をはかろうとする人々まで含まれていた。このような組織の他に、モンテツソーリ自身のトレーニング・コースを卒業した者の同窓会的組織 (California Alumnae Association) がカリフォルニアで結成されており、これとモンテツソーリとの関係は緊密⁽¹⁰⁾であつた。

この様に、協会の結成と活動、支部の増加の中で、M運動が組織化されていった。この過程の中で、モンテツソーリ自身も、二度の訪米をしモデル授業をし、講演を行ないトレーニングコースも開催した。彼女の第1回目の訪米は、1913年、M運動がピークに達した年である。第2回目は、1915年夏このとき、6週間にわたるコースが開かれ、3—6歳の子どもの対象とした公開授業も行なわれた。このとき、モンテツソーリの助手をつとめたのが、H. パーカスト (Helen Parkhurst) とムーア (Moor) であつた。二人とも、ローマにおける直弟子である。

1915年1月、モンテツソーリの第2回目の訪米が行なわれる数カ月前に、それまでM運動の組織的中核であつたモンテツソーリ教育協会の内部分裂が生じた。そして、この協会とは別にH. パーカストを中心とした「国内モンテツソーリ教育促進財団 (The National Montessori Promotion Fund)」が、ニューヨークに設立された。この分裂は、先の協会側にとっては、寝耳に水の出来事であつた。この分裂の原因には、A. E. ジョージと協会側の対立協会の財政

困難などがある。新しい財団の委員は、次のようである。⁽¹¹⁾

名誉会長、マリア・モンテッソーリ博士 (Doctor Maria Montessori)

会長、A.L. ルーミス (A.L. Loomis)

副会長、C.L. ライリー (C.L. Railey)

会計、J.T. ライル夫人 (Mrs. J.T. Ryle)

秘書、D.H. McA. ライル (D.H. McA. Ryle)

秘書補佐、H. パーカスト (H. Parkhurst)

アメリカにおけるモンテッソーリ教育の指導者、H. パーカスト

委員会構成

W.S. コフィン (W.S. Coffin)

W.G. ロッド (Mrs. W.G. Load)

A.L. ルーミス (A.L. Loomis)

C.W. マクアピン (C.W. McApin)

I.C. マクイーバ (I.C. McKeever)

C.L. ライリー (C.L. Railey)

F.L. ロビンズ (F.L. Robbins)

D.H. ライル (D.H. McA. Ryle)

S. スローン (S. Sloan)

先の協会の役員は全面的に入れ替えられ、新組織が結成された。この組織の中に、H. パーカストの果たした役割りは、大きく、次のような点で評価される。(イ) 仕事、財政士の処理、つまり国内を二つの地域に分け、(ミシシッピから東と西)、前者をパーカストの、後者をモンテッソーリの管轄にし、増加し、複雑化した仕事を処理し、財政の向上をはかることにつとめた。(ロ) 1917年5月1日アメリカ合衆国におけるモンテッソーリ・クラス、モンテッソーリ教師、養成コースの学生、モンテッソーリ協会の名簿録」(Directory of Montessori Class Teachers, College students, and Montessori Associations in the United States) を公刊した。これによればモンテッソーリ教員資格を有する者は、次表のようである。

こうした動きの中で、ベル夫人は、モンテッソーリ教育協会を解散し、その支部は、国内モンテッソーリ教育促進財団に加入した。ベル夫人は、ワシントン支部を再組織し、かつ国内モンテッソーリ教育促進財団の委員会のメンバーをも兼任することになった。

1917年5月1日時点での Personnel (ペルソネル) モンテッソーリ教員資格を持つ者は次のようである。

	モンテッソーリ・クラスを受け持つ者	モンテッソーリ・クラスを受けていない者
卒業生 a (資格既得者)	135	53
学生 b	21	39
合計数	156	92

a 公認のモンテッソーリ・トレーニング・コースを出た者

b モンテッソーリ教員養成大学在籍者

こうしたパーカストによる組織のたてなおしの努力にもかかわらず、この財団は、ほぼ1年間の機能を果たただけで、1918年再び解散した。ここに到りM運動はほぼ衰退をする。この間に、1916年ニューヨークに、モンテッソーリ教員養成大学 (Montessori Normal College) が設立された。ここに入学できる者は公認された中等学校卒業以上の者であり、2年間のコースであった。ここを卒業するとモンテッソーリ教員資格 (Montessori diploma) が与えられた。1917年には60人の学生が籍を置いていた。必須科目は、(イ) 必理学、自然科学、芸術、(ロ) 教育史、児童文学、身体的教育及びモンテッソーリ教育方法に関するもの。(イ) は、コロンビア大学で受講し、(ロ) は、モンテッソーリ教員養成大学でとるしくみになっていた。⁽¹²⁾ こうして国際コースと国内コースの有資格者が現われた。しかし、この国内の養成大学設立も、M運動衰退の歯止めにはならなかった。

5. モンテッソーリ・スクールの状況

最初、ローマのスラム街でモンテッソーリ教育の行なわれた施設は、学校ではなく「子どもの家」(Casa dei Bambini) という保育施設であった。それが、合衆国に導入されたとき、学校 (School) と呼ばれているのである。このことは合衆国における第一のM運動においてM教育の導入の在り方を示しているように思われる。この代表的なものが、A.E. ジョージの指導による、モンテッソーリ教育協会系の学校であった。

フギナ (Fugina, C.D.P.) は、このことを次のように述べている。「……モンテッソーリは、彼女の最初の実験を、貧困と不潔で知られたローマの、サン・ロレンツォー区で行なった一方、最初のアメリカのモンテッソーリ・スクールは、ハドソン河を一望に見わたせる、美しい家屋を本拠地とした。そこに来る子どもたちは、教養のある家庭の出身であった。そうした家庭の最大の望みは、自分の子どもたちに、教育においても、楽しいことでも、可能な限りの最良の道を与えてやることなのであった。…」このようにモンテッソーリ・スクールの一つの代表的な型は、きわめて裕福で、教養のある階層の教育的要求に支えられていたのである。ケオフ (J. Keough) の論文においても、同様に指摘されている。

A.E. ジョージは、こうした階層の子どもたちが、モンテッソーリ・スクールの中で、どのようにして自立を獲得していくのか、次のように述べている。「……最初の2週間は、非常に落胆した。……しかし、子どもたちは、関心の対象を見出すや否や、無秩序は消えうせた。彼らは、精神的にウロウロしている状態よりもっと多くの楽しみを、ブロックや色板、階段状の教具に見い出した。彼らは、今や生活に新しい真剣な目的を持ったのである。そして、その集中力によって、真の自立を勝ちとったのである。以前は、お互いに乳母や両親にもたれかかっていた子どもたちは、独力で始めた。自分の意志でボタンかけやひも結びのゲームをしはじめ、自分で衣服の着脱を始めた。又自分自身でやる技術を習得していない子どもも、乳母の手だすけを嫌がるようになりはじめ、自分でやりはじめた。教室においては、お互いに真似ることをやめ、しだいに自立を獲得した……」

この様なスクールの他に、協会側も、観察、実習、研究のためのモデル・スクールであり、かつ、貧しい、恵まれない家庭の子どもを対象とする無料学校を設立していた。そうした中には、1917年ごろにはイリノイ州のオークパーク (Oak Park) のアルウィン・スクール (Alkwin School) テキサス州のサン・アントニオ・スクール (San Antonio School) のように、ハンディキャップのある子どもを対象とし、無

料でモンテッソーリ教育を行なう学校も出現していた。M教育への全体的関心は薄れていったが、このように、一方では子どもの側の発達上の要求に根ざした、地道な入り方もみられるのである。

1917年⁽¹⁴⁾では、表のように 104のスクールが存在した。

州	スクール
アルカンサス	1
カリフォルニア	23
コネチカット	2
コロンビア地区	4
イリノイ	9
インディアナ	1
カンサス	1
メリーランド	1
マサチューセッツ	6
ミズリー	2
ニュー・ハンプシャー	1
ニュー・ジャージー	3
ニューヨーク	29
オハイオ	3
オレゴン	3
ペンシルバニア	5
ロードアイランド	3
サウスカロライナ	1
テキサス	1
バージニア	1
ワシントン	2
ウイスコンシン	2
合 計 数	104

(1917. 5. 1現在)

6. M運動の衰退の原因

M運動の衰退の原因は、先述にあげた論文によれば、次のようである。①教具の使用に未熟な教師がいて、M教育への信頼を失なわせた。②モンテッソーリ自身の組織的能力の欠如。これが、モンテッソーリ教育協会の内部分裂を生む一原因となった。③モンテッソーリ思想の理解が、十分に行なわれなかった。とくに自由の概念が理解されていなかった。④モンテッソーリ自身がその教育方法を、部分的にとり入れてもよいと教えていたことが、混乱を生じさせた。⑤組織内の財政困難。⑥モンテッソーリ教育に対する幼稚園教師による、想像性、社会性

判の発達への配慮がM教育に欠如しているという批判が強かった。⑦教具への過信がみられた。⑧M教育は子どもの精神面に対して過少評価しているのではないかという危惧をいだかれた。⑨R.H.ティラニー (R.H. Tirenay, J. ジェスイット派) らによるカソリック側からの批判が厳しかった。R.H. ティラニーは、モンテッソーリが、人類学者ロンブローゾ (Lombroso) を支持し、先決説を持ちあげていることを批判した。⑩これらに加えてM教育理論に、決定的打撃を与えたのは、W.H. キルパトリック (Kilpatrick) であった。彼は、モンテッソーリ教育理論は、ルソー以来言われてきた内在的発達観に基づく、古い教育理論であるとした。そして教育は「生活そのものであり、生活のための準備ではない」のだから、3 R's は、就学前段階で教えるべきではないとして、M教育の知的教育内容について批判をむけた。そして、自由な遊戯こそ、幼ない子どもにとって重要であると強調した。

以上、運動組織内部の問題、M教育理解の欠如、カソリック側による、M教育の実際の性格に対する批判、キルパトリックを中心とする進歩主義教育論及びフレーベル主義者の側からの批判がなされ、それらが、M運動衰退へとつながっていったのである。現象として、1917年ごろから、モンテッソーリ・スクールの閉鎖が頻りにみられ、中には、進歩主義教育の学校 (Progressive school) に変わるものも見られた。⁽¹⁵⁾

7. お わ り に

以上みたように、M運動は、当時の合衆国の幼児教育理論及び実践に対してどのような影響を持ち、意味を持っていたのかということについて、更に、1912—14, 5年の間の文献の内容検討をすることによって、みていく必要がある。又、M教育に対する批判についても、理論的対立点を明らかにしていく必要がある。

(註)

- (1) Learning How to Learn, 1962.
Helicon Baltimore-Dublin, Nancy McCormick Rambush. P. 143—175. 本表の作成は、林 (埼玉大学) と阿部による。
- (2) The Growth of The Montessori Movement in the United States, P. Appelbaum 1909—1970. P. 72
- (3) 前掲書. P. 77
- (4) 前掲書. P. 75—76
- (5) Origins and Current Status of the Montessori Movement in the United States. Fugina C. D. P. P. 47
- (6) 前掲書. P. 53
- (7) Fugina. C. D. P. P. 55
- (8) 前掲書. P. 55
- (9) 前掲書. P. 55
- (10) P. Appelbaum, P. 83—84
- (11) 前掲書. P. 60
- (12) 前掲書. P. 65, ローマの国際モンテッソーリ・トレーニング・コースには、合衆国からは45人が在籍していた。
- (13) Fugina. P. 49—50
- (14) Conditions Associated With The Rise and Decline of the Montessori Method of Kindergarten—Nursery Education in the United States from 1911—1921. M. Wills. P. 38
- (15) Fugina. P. 70—72

本稿の内容は、「近代幼児教育史研究」(第2号, 1977. 3) に載せた拙稿「アメリカ合衆国におけるモンテッソーリ運動の展開 (その1)—20世紀初頭におけるモンテッソーリ教育の導入と受容の在り方—」と一部重複をしている。(又、本研究は、科学研究費補助金による研究である。)

<表1>

年 代 別 統 計

	雑 誌 (紹介記事)	新 聞 【週刊誌】	機 関 誌 (学会)	モンテッ ソリ協会	政府刊行 物・リポ ート	マスタ ー・ドク ター論 文	著作・翻訳	モンテッ ソリ中心 の単行本	部分的に なった単 行本
1907	0	0	0		0	0			
1908	0	0	0		0	0			
9	2	0	0		0	0			
10	1	0	0		0	0			
11	6	0	0		0	0			
12	43(+16)	3	8		1	0	1	2	
13	59(+21)[+2]	11	5		4	0	1	5	2
14	39(+28)	3【+1】	3		5	0	1	5	1
15	14(+ 4)	4	3	2	1	0		1	1
16	10	1	2	2	1	0			
17	7(+ 1)	1	1		0	1	1		
18	3(+ 2)	0	0		0	0			3
19	7	3	0		0	0		1	
20	2	4【+1】	0		0	0		1	1
21	2(+ 2)	6	0		0	0		1	
22	0	2	0		0	0			1
23	1	0	0		0	0			2
24	1	0	3	1	0	0		1	1
25	1	0	0	1	0	1			1
26	2	2	0		1	0	1		
27	4	3	0		0	0			
28	4	0	0		0	0			
29	4	4	1		0	0	1		
30	2(+ 1)	0	1		0	0		1	
31	4	1【+2】	1		0	0			1
32	3	2【+2】	2		0	1	2	1	
33	0(+ 2)	1	1		0	0		1	1
34	1(+ 5)	0	1		0	0	1	1	
35	0	0	1		0	0			1
56	3	2	1		0	0	1		
	雑 誌 (英・米合)	新 聞 【週刊誌】	機 関 誌	モンテッ ソリ協会	政府刊行 物・リポ ート	マスタ ー・ドク ター論 文	〃	〃	〃
1937	3	1	0		0	1			
38	1	1	0	1	0	0			1
39	1	2	1		0	0			1
40	1	1	0		0	0			1
41	0	1	0		0	0	1		
42	0	0	0		0	0			
43	0	0	0		0	1			
44	1	0	0		0	2			
45	0	0	0		0	0			
46	2	0	0		0	1			
47	1	2	0		0	1		1	1
48	1	2	0		0	0	5		
49	1	2	0		0	0	1		1
50	2	1	0		0	0			1
51	1	4	0		0	1			1
52	6	4	0		0	0		1	
53	3	3	0		0	0			
54	0	0	0		0	0			
55	0	0	0		0	0	1		1
56	3	3	0		0	0			
57	1	3	0		0	1			1
58	1	3	0		0	1			
59	3(+5)	0	0		0	0		1	
60	3(+1)	1	0	3	0	0			
61	5	3	0		0	1			

1958 UNESCO

不明 1

カナダ 1

マリオ 1

1930 Towad New Education

<表 2>

年	分類 雑誌	モンテッ ソーリの 著作紹介 及び書評	新聞及び 週刊誌	学会及び 団体の 機関誌	モンテッ ソーリの 協会の 発刊物	政府及び 行政委員 会報告	マスコミ 及び論文	モンテッ ソーリの 著作及び 翻訳	モンテッ ソーリ 教育とし ての単行 本	全体の 一部とし ての もの	扱われた 総件数
1912	43	16	3	8	0	1	0	1	2	0	74
1913	59	22	11	5	0	4	0	1	5	2	109
1914	39	28	4	3	0	5	0	1	5	1	86
分 類 別 件 数	143	66	18	16	0	10	0	3	12	3	269
1909— 1961ま での総数	265	90	94	35	10	13	13	18	24	25	587
% 1909— 1961	53.2	73.3	19.1	45.7	0	76.18	0	16.7	50.0	10.2	45.8

<表 3>

